

# 経験則の尺度

## —横浜開港資料館館務実習を通して—

私たちが普段何気なく利用し、身近に溢れているあらゆる分野や業界には、実際に自ら飛び込んでみると解らない事、そして自分の常識がひっくり返るような体験が、実に数え切れないほど潜んでいる。それを改めて強く学んだのは、夏休みに参加した博物館施設での館務実習だった。私は2017年8月22日〜27日の期間、学芸員資格課程の一環として横浜開港資料館での館務実習に参加させて頂き、中でも横浜開港当時に現像・作成された写真の技術と写真アルバムの資料に大きな衝撃を受けた。

今回横浜開港資料館での館務実習に参加するきっかけとなったのが、学芸員資格課程のプログラムだった。学芸員課程は2年生〜4年生のおよそ三年間にわたり、博物館学をはじめ博物館施設に携わるのに必要な科目を履修する希望制のプログラムだ。学外での館務実習はこれらの集大成ともいえる項目で、学芸員課程の中で最も重要な実習科目だった。

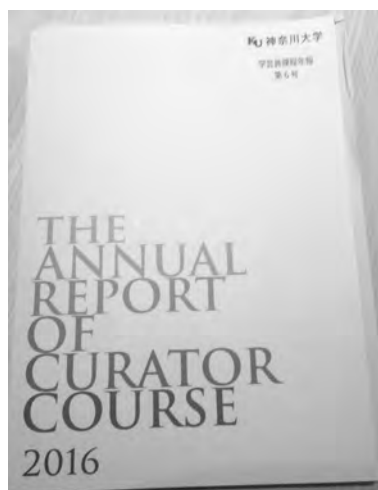
課程を履修するうえで不可欠の館務実習に、なぜ開港資料館を選んだのか。それは、高校時代に加入していた部活動での行事が関係していた。

私は史跡等を巡るフィールドワークや、日雇い労働者を対象にした横浜寿町での炊き出しボランティア参加などを行う部活動に加入しており、顧問の先生に伴い横浜周辺のフィールドワークを何度か行った。その時に必ず話題になったのが、横浜開港当時の様相や関東大震災についてだった。なぜ横浜に居留地が置かれたのか、「関内」の意味合い、居留地外の横浜の隆盛、山下公園が出来た経緯、眞葛焼……この部活動フィールドワークで訪れた場所ごとに耳にした横浜の歴史は興味深いものばかりだった。この体験が発端となり、横浜が開港した当時の様子や時代背景について詳しく知りたいと考え、実習先として当時の資料が多く所蔵されている横浜開港資料館を選んだのだ。

外国語学部 中国語学科 4年 小橋 風音

六日間の館務実習では、バックヤードにある書庫や撮影室などを見学し、実際に書架の整理や収蔵資料の情報記入、マイクロフィルムの整理など、多くの業務を体験することが出来た。実習中は様々な資料に触れる機会があり、当時横浜で発行された外国語新聞や浮世絵、絵葉書など多くの貴重な資料を手にとることが出来た。そこで観察した中でも最も印象に残っているのが、古写真アルバムだ。私が古写真アルバムの整理に携わったのは実習五日目のことで、講堂に資料を搬入し、保存状態の観察と、資料保護のために保護紙を差し込む作業を行った。

搬入したアルバムはどれも個性豊かで、被写体として映る人物や風景も様々だった。アルバムの装丁にもいくつか種類があり、その中でも最も驚いたのが表紙・裏表紙に蒔絵が施された写真アルバムだ。実習中に搬入したアルバムのうち3分の1ほどが蒔絵を用いた装丁で、螺鈿などの繊細な細工により、桜や鶴たちがあしらわれていた。



学芸員課程博物館実習の報告集 (2016年)

当時の写真アルバムは、外国人・観光客向けに作られた豪華な装飾を加えたものも多く出回っており、蒔絵の装丁もその分類の一つだという。蒔絵のデザインも多種多様で、地が黒のもの、赤茶のもの、意匠は鳥や花を表したものが多かったが、どの資料も当時の工芸が盛んであったことを強く感じるものばかりだ。

アルバムの中に収められている白黒の写真にも、人の手で彩色を加えたものがいくつかあり、彩色を手掛けた製作者たちの色の付け方の違いも、多くの写真を見比べることで読み取ることができた。

この「古写真アルバム」を目にした時、にわかには信じられなかった。自分の「当たり前」の範疇では、本の装丁は紙、もしくは革で作られたものしかなかったからだ。勿論、当時の写真といえば白黒と相場が決まっている。

しかしその経験則が一瞬にして裏切られた。想像の域を超えたものを目の前にし、自身の経験

の及ぶ範囲が狭いと思い知った時に私が受けた衝撃は、ショックというより感動だった。当時の工芸技術と、アルバム作成者の思い出が詰まった写真を一つにした資料が、とても贅沢で貴重なものだと思感したのだ。すっかり豪華な装丁に魅入ってしまった私は、その日搬入したアルバム資料の装丁を（ほかの班のものも）できる限り観察してまわった。

横浜開港資料館での館務実習を通して、海外新聞・マイクロフィルム・古写真アルバム・絵葉書・海外資料などの多岐にわたる資料に触れ、資料館の業務に携わり、学芸員、職員の方々から様々な知識を得ることで、博物館施設について多くのことを知り、肌で学ぶことが出来た。

この六日間で私が手に取らせていただいた資料の中には、しっかりと保存をしても劣化が進んでしまうものやマイクロフィルムのようにデリケートで、劣化が始まると回復が難しい資料などがあつた。大学の講義でも保存の重要性は学んでいたが、実際に携わると、口で唱える以上に重要で深刻な項目であることを再認識することが出来た。

たった六日間の経験だが、自分が経験した以上に学芸員・職員の方々は様々な問題に向き合っているのだということも実感した。今回の実習では本当に新しく知ること、気づかされることが多く、自分の知識や経験がまだまだ未熟で、手の届く範囲でしか物事をはかれないことも身に沁みた。螺鈿や漆で彩られた装丁の鮮やかさと、素朴な彩色の古写真は、決して忘れることはないだろう。

まだまだ自身の考える常識や物差しで測れないことは、この先いくらでも現れるに違いない。近い将来、館務実習での経験に似た衝撃が待っていると思うと、今から楽しみだ。



実習先の横浜開港資料館